

大塚敬節
責任編集
矢数道明

近世漢方醫學書集成

102

名古屋玄医 一

名著出版
刊



南京中医药大学图书馆版权所有

世漢方医学書集成 102 名古屋玄医(-)

第Ⅳ期
全16卷

昭和五十九年五月二十五日 発行

編者 大塚敬節

矢数道明

発行者 中村安孝

発行所 株式会社 名著出版

東京都文京区小石川三ノ十ノ五
電話東京(八二五)一二七〇番代
振替口座 東京七一二七四九番

製版所 株式会社 日本写真製版社

印刷所 有限会社 伊藤印刷

製本所 辻本製本所



予約限定版

落丁本・乱丁本はお取替えします。

責任編集

大塚 敬節

矢数 道明

編集委員

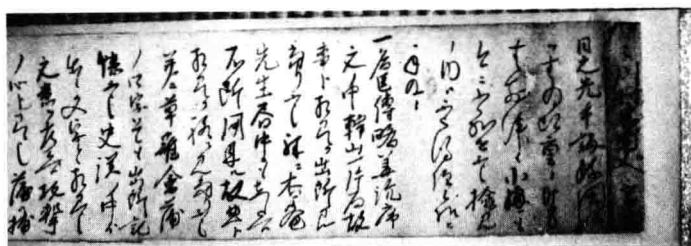
山田 光胤

寺師 睦宗

大塚 恭男

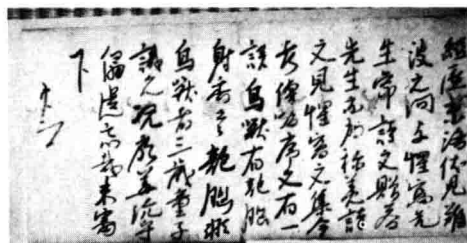
矢数 圭堂

松田 邦夫



名古屋玄医自筆書簡

大塚恭男氏所蔵



名古屋玄医 自筆書簡について

これは名古屋玄医が川村玄甫（経歴等詳細不明）からの姜沆きやうげんの『名医伝略』序文に対する問い合わせに対する返答の書。

姜沆は慶長三年（一五九八）から五年まで来朝した、朝鮮の秀れた朱子学者。藤原惺窩らとの交流があった。

凡 例

- 一、本書一〇二卷「名古屋玄医(-)」には、『医方問余』雜病門、卷之一く卷之五を収録した。
- 一、本書は全て影印版によったが、影印にあたっては次のようにした。
 - イ、新たに柱と頁数を付した。
 - ロ、底本を縮少し、一頁に半丁ずつ収めた。
 - ハ、裏表紙や記事のない白紙は省略した。
 - ニ、虫喰い等により判読不良な箇所は、補正したところもある。
- 一、底本は次の通りである。
 - 『医方問余』写本(安永五年写)二十一卷 十三冊(国立国会図書館所蔵)
- 一、解説は花輪壽彦(北里研究所附属東洋医学総合研究所)が執筆した。

名古屋玄医について

花 輪 壽 彦

一、緒 言

名古屋玄医については、「古方派」の嚆矢であるとか、桂枝湯類を多用したとか、逆に確かに傷寒論に帰れとは主張したが、実際の処方運用は「後世派」の枠を脱していない、等々種々の断片的な記載はなされていても、彼の医学思想とその臨床、及び医史学的な位置づけについての系統的な研究はこれまで甚だ不充分であると言つてよい。

特に注意を要する点は、富士川游の名著『日本医学史』に

名古屋玄医が学説の宗師とするところは喻嘉言の書にして、喻嘉言（名は昌）は明の末、順

治五年（我が慶安元年）に傷寒尚論を著し……

云々と名古屋玄医の学説が喻昌学説を基盤にして成立したと述べているために、それ以後の書は、すべてこれを援用してあたかも定説の如き感を呈している点である。

これは『日本医譜』⁽¹⁾及び『皇国名医伝』⁽²⁾よりの引用であろうが、彼の多くの著作の中についてこの言葉を見出すことはできず、またこれから論ずる如く、玄医の医学思想、及び臨床的な基盤を喻昌一人にのみ求めるのは無理があるとの結論に達した。

それは玄医が喻昌学説に全く無関心であつたという意味ではない。むしろ喻昌学説もある文脈（後述）の下には、これを積極的にとり入れた。ただ、彼の学問的基盤は別のところにある。そして実際に彼が学問的に最も影響を受けたとして序文等に記しているのは

張景岳（一五六三—一六四〇）

薛己（一四八八—一五五八）

程應旆（清代・康熙帝の頃活躍）

の三人である。

また次の点にも注意しておきたいと思う。『日本医学史』によれば名古屋玄医以前の医家が、補中益気湯や十全大補湯など「温補」に偏していたとしてこれを富士川は

李朱医学が我が邦に行われてより既に百年、補血益気の説、独り盛に行われてその弊言うに

忍びざるものあり

として、ここに名古屋玄医は医方復古の論を立て、「温補乱用の民命を伐害する所以」を説いたとする。そしてこの温補に替わって玄医の提出した医論は「桂枝や附子の類、温熱の剤を本として『衛氣』を助けることを主張した」というのである。

では、「温補」と「熱補」とはそれほど大きなちがいがあるのだろうか。「温補」でも充分に「衛氣」を助けられるのではないか、といった疑問が生じはしないか。

「古方派」の最大のスローガンは、「虚」を補なうことばかりに目を奪われがちな「後世派」へのアンチ・テーゼではなかったか。

こうした点に留意しながら、名古屋玄医について主要な論点を検討していきたい。

特に名古屋玄医を「古方派」の魁ととらえるならば、玄医の医説を洗いなおすことにより、逆にむしろ「古方派」とは何かという定義の問題や、「古方派」「後世派」「折衷派」といった分類の妥当性を考えなおす必要が新たに生じてくるように筆者には思われてならない。

まず玄医のアウトラインをつかむため、簡単に略歴を追ってみたい。

二、略 歴

名古屋玄医は寛永五年（一六二八）三月二十一日、京都に生まれた。字は富潤、またの字を関甫、

宜春庵に居し、晩年自ら丹水子と号した。父は宗怡、母は石井氏。一男二女が生まれたが、二女は幼にして卒し、玄医のみ育った。玄医は弱齡から多病で足が不自由になり、またたいへんな口吃（どもり）であつたが、よく書を読み学に秀でていた。經学（孔子の教えを書いた經書を研究する

學問）を足利学校の徒・羽州宗純に学び、周易筮儀に長けていた。特に『周易』の本義は「貴陽賤陰」にあると会得してから、この理に基づいて、『内經』『難經』『諸病源候論』『傷寒論』『金匱要略』の諸書を「一貫」した医書として把握しようとした。彼は張景岳・程應旆の學說の影響下に『内經』『難經』において陽氣の本源たる「命門」と腠理への通暢としての「三焦」の字義を極め、『諸病源候論』『傷寒論』『金匱要略』は「衛氣」の不足に乗じて、寒氣に傷られておこる病態を述べた書であるとした。この義に拠つて治法はまず「衛氣」（あるいは「陽氣」）を扶けることにあると考えた。

彼は「衛氣」の虚を助けることを病氣の「本治法」とし、そのあとで、残つた病状に対し、虚実を考慮して「標治」することを説いた。『医方問余』とは、まず「虚」を治し、そのあとで「余」を問うの意である。この説は薛己の學說に負うところが大きい。

このように玄医の医学思想は、朱丹溪以降の主として『易水学派』と程應旆の學說的影響下に形成されていった。

玄医は四十歳頃から、自己の医説を強く主張し、そのためか周囲の医からの反感も強かつたよ

うである⁽³⁾。

四十六歳頃から腰脚癱瘓（運動麻痺）となり、両手も痿痺し、廃人の如くなったが、氣力は少しも衰えることなく晩年まで多くの著述をあらわした。

墓石には「編述した書十三部、家藏さらに二十部、未だ脱稿せざるもの甚だ多し」とある。

玄医の医の師は定かでないが、『金匱要略註解』中に吾師・福井慮庵とある⁽⁵⁾。福井慮庵は曲直瀬寿徳院玄由の門人で、名古屋玄医の「玄」は曲直瀬玄朔の一門の名に由来する。玄医の師は初め彼に「玄怡」という名を与えたが、父の諱を犯すのをさけて、「玄医」に改めたという。「玄医」（玄人の医師）という名に恥じぬよう自らを常に誠慎することを誓ったという⁽⁶⁾。

元祿九年（一六九六）四月十八日辰の刻、病を得て没す。享年六十九。墓は京都市浄福寺通一条上る浄福寺にある（図2）。玄医の墓石の右に隣接する墓石も「亘〇〇〇」とあるが、既に表面がくずれて判読できない。玄医の墓石と向かいあつて同型の墓石があるが、これは名古屋玄医の嗣・玄篤に師事した鳴鶴・菅隆珀の墓である（図3）。碑文中に「名古屋玄篤」「名古屋玄医」の名や「学を好み、喜怒を色にあらわさず、素難を研籍し、長沙の教を祖述し云々」が読めるが全文を充分解読できない。菅隆珀の弟子が福井楓亭である。

名古屋玄医の学統について、従来の学統図には甚だ疑問があるが、これに替わるものを提示するだけの資料が集められなかったので、ここでは省略した。

而又加之脉極虛孔遇運爲寒故消穀不化孔必
 脫血失精須無疑也脈轉諸邪微聚若心腎不
 交氣結厥肝出故男子遺精女子夢交此治也不
 可不同於心腎是以他骨壯蠲滯劑止心腎虛脫
 且聖忘桂枝爲藥雖養血又行衛氣雖利肝出此
 以不可不與焉今之僧尼服儒多有此症然不與
 此方用歸脾湯補心湯等不重此通所以不效仲
 景書也吾師福井慮庵方有壯蠲凡與之甚有驗
 予試數人隨手而應方見類方也
 桂枝加龍骨牡蠣湯方小兒日晡潮熱汗出惡寒
 身重自微時于春三分數耳

図1 『金匱要略註解』中に
 「吾師福井慮庵」とある。



図3 菅隆珀の墓



図2 名古屋玄医の墓

玄医の著書のうち以下のものは容易に閲覧できる（カッコ内は筆者が閲覧したもの）。

『医方問余』（京大富士川文庫・国会図書館）

『医学愚得』（大塚恭男蔵書）

『金匱要略註解』（東北大狩野文庫）

『纂言方考評議』（東北大狩野文庫）

『丹水子』（内閣文庫）

『丹水家訓』（内閣文庫）

『食物本草』（『食物本草大成』臨川書店）

『続方考』（東北大狩野文庫・東大鶚軒文庫）

『脈学源委』（内閣文庫）

『医学随筆』（国会図書館）

『難経註疏』（『三焦命門弁』と合本）（東北大狩野文庫・大塚恭男蔵書）

『用方規矩』（京大富士川文庫・東大鶚軒文庫）

『医方規矩』（大塚恭男蔵書・国会図書館）

『怪病一得』（大塚恭男蔵書・京大富士川文庫）

『丹水翁一流』（京大富士川文庫）

(没)										(生)
96	93	89	87	85	81	79	71	69	68	1628年
金匱要略註解※	丹水家訓	怪癖一得	丹水子	經驗方	医学愚得・医学随筆	医方問余・難經註疏	食物本草	經脈葉註・脈要源委	纂言方考	

図 4

『經驗方』(京大富士川文庫)

『医方摘要』(大塚恭男蔵書・国会図書館)

『病名俗解』(内閣文庫)

『名古屋丹水翁痢疾弁』(京大富士川文庫)

なお名古屋玄医の『易経』に対する理解を知る意味で『易経集註抄』をぜひ見たいと念じているのだが、目下のところ果たせない。

これらの諸書のうち主要なものを序文の刊年によって記すと図4の如くなる。

※ただし『難經註疏』後序によると玄医の弟子の伊藤素安によって一六八三年に『宜春全書』の手写が作られたという。その中に『金匱要略註解』も記されているので、一六八三年までにこの書はできあがっていたことになる。『宜春全書』に収められている書は以下のものである。

難經註疏、陰陽応象大論註疏、金匱要略註疏(解)、本草纂言、本草纂言、医方問余、纂言方考、続方考、脈要源委、食物本草、

医学提要、医学随筆、堪輿輯録、摸蘇録、医方摘要、藥対摘要、脈要訓蒙、病名俗解、必要灸穴、老子諺解、杜律諺解。

三、儒学と歴試

名古屋玄医の医学思想を支えるものは「儒学」と「歴試」の二つである。

『医学随筆』（延宝九年刊）の冒頭にみる次の言葉

小子、医を学ばんと要せば則ち当にまず儒書を読むべし。然る時は自ら経義に明にして術もまた精かるべし。然らずんば則ちただ針灸・方伎を事として終に精微に入ることなし。

には「医」とは「儒学」という学問に裏打ちされた「学」でなければならぬ、という玄医の立場が明白に読みとれる。

こうした立場は『丹水子』などにも随所にみられ、そのことは翻えつてみれば、医を単に「方伎師」としてしかみなかった「庸医」に対する玄医の強い憤りとみることができる。

ただ、玄医は医とは単に机上の学問であつてはならぬという。

『丹水子』中に次の言葉をみる。

医の巧拙は、未だ痊やすと痊やさざるとを似て焉を定むべからず。惟、宜しく能く医書を読み歴試もまた多くして実ある者に任すべし。たとい能く書を読み実ありとも、若し少年に

して歴試する所なき者には妄に任すべからず。何となれば則ち、歴試する所なくして、直ちに医書の述ぶる所を以て之を療して、多く敗を取ればなり。今の人、他邦の医と聞くとときは、則ち軽々しく信じて之に投ず。是れ何と云うことぞや。

名古屋玄医は、儒学によつて医を方伎としての医術から、学としての医学にまで高めようとした。しかもそれは「歴試」と言う経験主義的実証主義に支えられたものでなければならぬというのである。

ただし玄医が「儒学によつて医を方伎から学にまで高めようとした」という時、それ以前の心ある医師達がすべて「方伎師」に甘んじていたという意味ではもちろんない。玄医が問題にしたのは、どんな病氣にでも「補中益氣湯」「八味丸」「十全大補湯」などという無難な温補剤を使つて、それでよしとしていた無学な「方伎師」に対してであつた。

もう一つ忘れてならないことがある。

名古屋玄医は「古方派」か「後世派」か、といった口悪くいえば、極めて短絡的な議論は、初めから「古方派」と「後世派」を対蹠的な位置において、あるいは「後世派」の医説を否定することによつて「古方派」が誕生するといった「構図」を想定しての議論と思われるが、事實は曲直瀬の学統も玄医も、ともに中国医学を「日本的」に——ここではあえてこうした漠然とした表現に留めておこう——受容したのであつて、「後世派」を論破して玄医の医学観が構築されたので

はない。

つまり、いわゆる後々「後世派」と称されるグループの創始者、曲直瀬道三そして玄朔、および、その学統の秀英たちは「李東垣」「朱丹溪」の医学の日本的受容によって自らの医学的基盤を構築した。今、名古屋玄医の医説は、曲直瀬一門の「学説」を否定して自説を主張したのではなく、李東垣・朱丹溪以降の学説、特に李東垣の学統下の薛己、李中梓、張景岳、趙獻可といったいわゆる『易水学派』の学説、を日本的に受容したのであった。「温補」と「熱補」の相違は、こうした背景をふまえての議論でなければ本筋をつかみ得ぬであろう。

その上でなお我々が「後世派」と「古方派」の相違点をもし名古屋玄医の中にさぐるとしたら、李朱医学以降の中国医学を受容する際にみせた、玄医の受容の特徴——受け皿の相違——ということになる。それは当然、玄医の生きた時代の学問的基盤、すなわち当時の「儒学」の性格と密接にかかわりをもつ話として述べられることになるだろう。

四、名古屋玄医における中国医学の受容

名古屋玄医の医説は、主として李東垣の流れをくむ『易水学派』と、傷寒論の解釈における方有執—喻昌—程應旂（ていせき）といった『錯簡重訂派』（任应秋『中医各家学说』）の影響下に形成されている。まず玄医が自らの思想的基盤として第一にあげている「貴陽」あるいは「扶陽」という考えに